

飛鳥時代の建築の起原とその特質

関野 貞

緒 言

飛鳥時代の建築に関しては、伊東博士や天沼博士がたびたび詳論された。予もまた時々意見を發表した。いままた、飛鳥時代の建築を説かんとするは、屋上屋を架するの嫌いがなくてもない。よりてここには主として、飛鳥時代の建築の起原とその特質を論じてみたいと思う。ただ目下非常に多忙であるから、十分に記述すること能^{あた}わざるを遺憾とする。

一 総 説

欽明天皇の十三年（五五二）百済の聖明王が、我が国に始めて仏像および経論を献ぜしより、仏教に伴い大陸の文化は朝鮮を経由して我が国に伝来し、建築術は他の芸術とともに急速の变化発展を示し、いわゆる飛鳥時代の様式が、旭日の昇るがごとく地平線上に輝き出た。

飛鳥時代は実に我が国の文化史上に一転期を画し、仏教の興隆とともに仏寺建築は大陸の様式を祖述して、特殊の発達を遂げ、宮殿建築またその影響を受けて、次第に宏壮のものとなつたが、陵墓建築はこれに反して、規模は小となり、制度は簡単のものとなつた。ただ神社建築のみ大和民族固有の伝統的様式を保持し、大陸文化の圏外に

立っていたのである。

予は煩を避け、この篇、主として大陸より輸入された様式と仏寺建築に及ぼせる影響を説き、他の宮殿建築や、陵墓建築や、神社建築のことは他日に譲りたいと思う。

二 飛鳥時代の建築の起原

飛鳥時代の様式は、主として、当時朝鮮の三国時代（すなわち百済・新羅・高句麗の三国鼎立時代）より輸入されたのであるが、最初に我が国に仏教を伝え、かつ我が国と最も親密なる関係を有していた百済に負う所が最も多かったのである。

しかし三国より伝えられた様式は、決して三国固有のものでない。当時の文化史上より達観すれば、シナの南北朝時代の様式を仏教とともに我が国に媒介したのことは明らかである。果してしからば、飛鳥時代建築の本源はシナの南北朝時代まで溯らねばならぬ。シナの南北朝時代の様式はいかにして発生せしやというに、シナ周・漢以来の伝統的建築が主流となり、これに西域・インド等の様式が影響したのである。西域・インドの様式の根本に溯れば、その中にガンダーラ式や、中インド式や、ササン式や、ビザント式や、ギリシア・ローマの様式の影響があるが、いま一々詳論するのいとまが無い。

しかし建築は他の絵画・彫刻・工芸と異なり、従来シナにおいては周・漢以来すこぶる発達せる固有の構造様式があつて、外来の仏教を講讃礼拝するに何らの不自由はなく、わざわざ外国の建築を模倣する必要を感じなかつたのである。すなわち仏像の安置、経論の講讃、儀式の執行、僧侶の居住等において、あたかも在来の宮殿・官衙の配置・平面・構造が最もよくこれに適合し、ただちにこれを利用して、ほとんど支障がなかつたのである。元来、「寺」という字はシナでは官衙のことである。伽藍を「寺」と称するに至つたのは、たまたま官衙建築が、ただち

に伽藍建築に應用されたことを示すのである。ただその細部の手法や裝飾の文様などが、多少インドやペルシアなどの影響を受けたのである。

我が飛鳥時代は朝鮮では、百濟・高句麗・新羅の三国時代の末期に当たり、シナでは南北朝時代より隋時代に相当している。すなわち欽明天皇の十三年仏教の始めて伝えられた時は、百濟では聖王（日本では聖明王という）の三十年、新羅では真興王の十三年、高句麗では陽原王の八年に当たり、またシナの南朝では梁の元帝の承聖元年、北朝では北斉の文宣帝の天保三年、西魏の帝欽の元年に当たっている。さらに、厩戸皇子が摂政として、仏法興隆の詔を發せられた推古天皇の元年（五九三）は、百濟の威徳王四十年、高句麗の嬰陽王四年、新羅の真平王十五年に当たり、シナでは南北を統一せし隋の文帝の開皇十三年に当たっている。

シナの南北朝時代の木造建築は一も残っていない。北朝のものには、石築には東魏武定二年（五四四）の神通寺四門塔（山東歷城）があり、塼築には北魏正光四年（五二三）の崇岳寺十二角十五層の塼塔（河南登封）があり、また、雲崗・竜門を始めとして多数の石窟がある。これらにより多少当時の建造物の様式を考うる事ができる。しかるに、南朝のものではきわめて不十分なる齊・梁間の棲霞寺の石窟（南京）があるのみにして、全く当時の様式の片鱗をすら知ることができぬ。ただ南京付近に南朝歴代帝王の陵墓があつて、その前に立てられた石獅・石柱・石碑等の手法により、多少当時芸術の一斑を知ることができのみである。ゆえに遺物上、南北様式の異同を知ることが困難であるが、南北石窟内に刻まれた仏像の様式にすこぶる似たる所があり、また石碑や石柱の裝飾に忍冬文様のあること、鳳凰や鬼物等の形式などに互いに共通する所があることから、大体において南北朝式は互いに類似する所多く、一の形式として取扱うことができる。しかも僅少の遺物の間においても、彼此多少の異同なき能わず、全く同一のものとして論ずることができぬ。例えば、墓前にある石獅は南北いずれも漢式より發達せしものなれども、その相貌姿勢に著しき相違がある。石碑またともにその起原を漢式に發すれども、南朝碑は漢碑の遺制たる量

の形跡および穿を有すれども、北朝碑では、暈は変じて竜を碑首に刻んだいわゆる螭首となり、かつ穿を有せざるのが普通となった。額の形や表面や側面の装飾の文様にも、はなはだしき相違がある。これらから推すも、当時の南北建築には細部において互いに異なる性質をもっていたことが想像される。

元来シナは大国であるから、南北において風土・氣候を同じくせず、黄河流域の住民と長江流域の住民とはさぶる稟性・氣質を異にしている。北方の重厚、南方の俊敏はその造り出だせる建築、その他の芸術に互いに相違せる性質を發揮していることは、今日のシナにおいても明らかに看取さるる所である。我がいわゆる和様の建築は唐より伝えられた北方系に属し、天竺様の建築は南宋より輸入されし南方系に属している。また禅宗に伴い伝来したいわゆる唐様の建築は、けだし南北融和の結果に成つたものである。かくのごとく和様・天竺様に發揮された特質は、ただちに南北住民の氣象を反映しているのである。

思つに東晋南渡以来、黄河流域の優秀なる漢民族は多く晋室に従いて南下し、在来の南方民族と混淆融和し、豊麗にして、しかも雄勁なる六朝芸術を造り出したのである。すなわち、一面には漢以来の伝統的色彩濃厚なれども、他面には大いに南方の自由・奔放・輕雋の氣象を露わせしものにして、南京付近にある梁碑の手法を見ても一斑を知ることができる。しかるに、北方黄河の流域に侵出せる北魏の鮮卑族は、元氣横溢、一面には漢民族と同化して、その文化を踏襲するとともに、他面には西域の様式を加味し、次第に従来の伝統を離れて、割合に自由の境地を開拓した。北朝碑が漢式の穿を捨て、暈を変じて立派な螭首を創造し、もつて隋・唐以後の様式の基を開いたのを見ても、その大勢を察することができる。

要するに、建築においても、南北互いに共通する様式を有せる間に、細部においてさぶる相違せる地方色を發揮したのである。ただこれを実証すべき遺物の無いのは遺憾である。北魏・北齊および隋時代の建造物の様式は、雲崗や天竜山や南北響堂山などの石窟を飾れる建築的細部により当時の木造建築の様式一斑を知ることができるが、

梁・陳間にはこれに比すべきものは全く発見されぬのである。

次に朝鮮の三国時代に入り来つた建築は、南北いずれなりやとの問題は容易に解決しがたい。無論高句麗は地勢上主として北朝に交通したのである。長寿王の平壤遷都後は盛んに北魏に朝貢し、その後、歴世北魏より東魏・北齊に交通しているが、南朝と往来せしことは稀である。当時主として、北魏・東魏・北齊等の北方系様式の輸入されたるべきは明白な事実である。平安南道江西郡遇賢里の大墓・中墓の玄室内に、北魏系の壁画や装飾を有するは当然のことである。当時の古墳内の壁面に往々、柱や斗拱とこうや墓股かふるまたの形を描いているから、これにより多少木造建築の様式を知ることができる。これらの様式は大要、雲崗・天竜山等の石窟に施された建築式細部と一致して、よく彼此の関係を語っている。

しかるに、百済は北方に高句麗が介在して陸路北朝との通路を塞いでいるが、海路南方との交通の便が多かつたから、北朝よりはむしろ南朝の方と親密の關係をもっている。文献上、梁・陳との交通は割合に頻繁であるが、北朝との往来は稀薄である。とくに我が国に始めて仏像および経論を献じた聖王は、その十六年（五三九）、都を泗璉ひ（いまの扶余）に移し、十九年、使を梁に遣わし朝貢せし際、毛詩博士・涅槃等經義・ならびに工匠・画師等を請い来らしめた。その工匠・画師を聘したのは、おそらくは新都の宮闕を築かんがためであつたであろう。その後もしばしば梁・陳に朝貢していたから、梁・陳の藝術は仏教とともに将来され、百済の建築界に大なる影響を与えたであろう。すなわち、百済は北朝よりは南朝の文化に負う所が多かつたであろう。これは地形上自然の勢である。もつとも高句麗を通じて北朝系の様式を輸入したことは無論あつたであろう。

さらに新羅は朝鮮半島の東南隅に偏在したから、シナとの交通は高句麗を経て北朝に通ずるか、海路ただちに南朝に通ずるかの二途であつたが、交通の便宜上、海路盛んに梁・陳に往来したが、文献上北魏・東魏には朝貢せず、ただ北齊と二、三回交通したに過ぎない。ゆえに新羅は直接には、主として南朝の影響を受け、間接には高句麗よ

り北朝系、百濟より南朝系の様式を伝えたようである。善徳王の時皇竜寺の九層塔を建立せし時、百濟より二百人の工匠を聘したのを見て、新羅は三国中シナとの交通最も不便の地にありしゆえ、その文化は最も後二国の後塵を拝していたことが分かる。

以上論ぜしがごとく、大体において、高句麗は北朝系、百濟・新羅は南朝系に属したようであるから、本国たるシナにおいて芸術上南北多少の相違があつたとせば、朝鮮においても高句麗と百濟・新羅との間において同様のことがいえる。しかるに、ここに最も注意すべきは、当時これらの国において使用せし尺度の問題である。

南北朝時代の用尺は隋書『律歷志』によれば、北魏には前尺・中尺・後尺の三種あつたが、その中の後尺が隋の開皇尺（後に唐の大尺、我が天平尺）となつた。隋書には晋前尺、すなわち、周尺を標準尺として、他をこれに比較しているが、この北魏の後尺は晋前尺の一尺二寸八分一釐に相当している。また東魏・北齊に用いられたものは、これより長くして晋前尺の一尺五寸八毫（これが朝鮮に入り、我が飛鳥尺となる）であつた。また南朝の宋・齊・梁・陳に用いられた宋氏尺は晋前尺の一尺六分四釐であつた。

朝鮮の三国では、いかなる尺度を用いしかというに、何ら文献上根拠とすべきものは無い。ただ我が飛鳥時代の建造物は予がすでに発表せしがごとく、いわゆる高麗尺（すなわちいまの曲尺の約一尺一寸七分六厘）を用いていた。法隆寺の金堂・中門・五重塔および歩廊はこの高麗尺を用いて計画されたことは明白の事実で、何人も異論の無い所である。四天王寺の堂塔伽藍も当初この高麗尺で計画されたのであることは、故長谷川輝雄君の研究によつて明らかにされた。この高麗尺はほとんど東魏尺と一致しているから、東魏尺が朝鮮を経て、我が国に輸入されたものと想像するに十分の理由がある。我が国に当時仏教建築を伝えた国は主として、百濟であるから、当時百濟は東魏尺を用いていたに相違ない。しかれども、百濟創立の伽藍の遺跡は全く廃滅し、これを実証するの手段が無い。しかるに、新羅において、当時東魏尺を用いていた証拠がある。すなわち新羅の旧都慶州なる皇竜寺の金堂址・

塔址の遺礎が明らかに東魏尺で計画されたのである。朝鮮総督府の小川敬吉氏の実測によれば、金堂は九間四間の大建築にして、礎石の完存せる北面の長さは百四十八尺六寸二分にして柱間はすべて均一であるから、

$$148.62 \div 9 = 16.5133 \dots \dots \text{柱間平均}$$

$$16.5133 \div 1.176 = 14.04 \quad \text{四捨五入して完数とせば14となる}$$

すなわち、柱間の平均は十六尺五寸一三三である。これを一・一七六をもって除し、高麗尺に換算すれば、あたかも十四尺となる。さらに、この十四尺をもって十六尺五寸一三三を除し、高麗尺の長さを求むれば、次のごとく一尺一寸七分九厘五となる。

$$16.5133 \div 14 = 1.1795$$

また金堂の梁間は左側面の後ろより三間だけ礎石が完存している。その長さ四十九尺四寸であるから、これを三除して柱間の平均を求むれば、十六尺四寸六六七となる。

$$49.40 \div 3 = 16.4667$$

$$16.4667 \div 1.175 = 14.002 \quad \text{完数とせば14となる}$$

さらに右の「じつくへい」一七六じつくこれを除し、高麗尺に換算せば、十四尺〇二となる。これを完数となせば、十四尺となり、桁行より計算せし柱間と同一となる。さらにこの十四尺をもって十六尺四寸六六七を除し、高麗尺の長さを求むれば、

$$16.4667 \div 14 = 1.1762$$

となり、前に求めしものと平均すれば、一尺一寸七分七厘九となる。

$$(1.1795 + 1.1762) \div 2 = 1.1779$$

この寸尺はほとんど我が飛鳥時代に使用された一尺一寸七分六厘と一致しているから、この皇竜寺の金堂の建築

に高麗尺、すなわち東魏尺が使用されたことが明白である。

この皇竜寺の創立は『三国史記』によれば、新羅真興王十四年（五五三）、北齊天保四年、梁承聖二年、百濟聖王三十一年）で、我が欽明天皇の十四年（五五三）、すなわち仏教伝来の翌年である。そして有名なる金堂本尊銅造丈六仏は真興王の三十五年（北齊武平五年、陳大建六年）に成っている。また『三国遺事』には金堂の落成を真平王六年（五八四）、陳至徳二年、隋開皇四年、我が敏達天皇十三年）としているが、とにかくこの皇竜寺の経営は、北朝にては北齊時代、南朝にては梁・陳時代に相当している。そしてその様式はとにかく、その尺度は東魏尺すなわち北齊尺を用いているのである。

また皇竜寺の有名な九層塔は百濟の工匠二百人を聘し、善徳王の十二年（六四三）、百濟義慈王三年、唐貞観十七年、我が皇極二年）に創建したのであるが、小川敬吉君の調査によれば、また東魏尺をもって経営されているから（煩わしければ寸尺の研究は省く）、百濟も新羅も、なお当時は依然東魏尺を用いていたことが分かる。

この皇竜寺堂塔の礎石の研究によりて、新羅も百濟も当時東魏尺すなわち北齊尺を用いていたこと明白になった。また北朝と文化的関係の最も深かった高句麗が、東魏尺を用いていたことは一毫も疑いを入るの余地は無いであらう。すなわち高句麗・百濟・新羅の三国はいずれも東魏尺を採用していたのである。百濟・新羅の芸術は主として南朝文化の影響を受けたるべきに、その建築に北朝の東魏尺を用いているのは、いかなる理由によるか不明であるが、あるいは先進国たる高句麗まず東魏尺を用い、高句麗を通じて北方文化を輸入せし百濟・新羅がこれにならったのであるかも知れぬ。いずれにしても、当時我が国に影響を及ぼした百濟にては、建築の構造様式は多く南朝の感化を蒙りしも、その使用の尺度は北朝の東魏尺を用いていたようである。

以上説き来りしことによつて、我が飛鳥時代建築の根源は、おのずから明瞭となつたであらう。換言すれば、当時の我が様式は主として、まず百濟より輸入せられ、また多少新羅よりも、高句麗よりも影響されたに相違ないが、大

体において、南朝系を祖述したものといい得よう。しかれども、その尺度は東魏系に属するものを用いたのである。次に考うべきは、当時の我が建築界は、仏教とともに入り来った優秀なる大陸建築に眩惑され、忠実に彼の直写・模倣をもつて満足せしや、否やの問題である。

三 飛鳥時代の建築の特質

従来簡單素朴をもつて甘んぜし我が建築界は、仏教とともに、大陸の優秀なる様式の輸入によって、いかに驚異の感に打たれたかは想像に余りある。その高き基壇、その複雑なる斗拱ときょう、その雄大なる軒、瓦葺の屋蓋、内外色彩の装飾、これみな従来ほとんど無かりし所のもの、莊嚴なる重層の仏殿、挺然として空を摩する多層塔より、歩廊・僧房・内外の諸門に至るまで宏壯の觀、輪奐りんかんの美、上下憧憬の的となり、その輸入に全力を惜しまなかつたであろう。しかれども、当時幸いに不世出の偉人聖德太子朝政を摂したまい、隋と対等の好みを通じて、国威を海外に確立し、我が固有せる所を保持すると同時に、外来文化を歓迎して、その長所を十分に摂取し、もつて精神的、物質的兩方面の發展に資せんとせられた。ゆえに当時建築においても、他の芸術においても、決して盲目的に彼の模倣に甘んぜず、研究取捨して、我れに適する所のもの工夫し、創造されたので、その精神は永く我が国民の胸臆裏に浸徹して、いかなる時代にありても、外来文化のために圧倒されることなく、常にその長所を取つて我が薬籠中のものとなし、もつて我が固有の様式を大成したのである。予はここにまず、飛鳥時代の伽藍の配置を説き、次に、建築の細部に及ぼし、我が特殊の様式手法の彼に異なる所あるを論じようと思う。

伽藍の配置 飛鳥時代の伽藍の配置に、四天王寺様と法隆寺様とあるは、すでに世人の知る所である。四天王寺のごとく、南大門・中門・塔婆・金堂・講堂と前後次第して南北中軸線の上に立てるは、大陸伝来の配置法である。元来シナ人はすべての点において、左右均斉を好み、整齊莊重をこととする。古今を通じて、重要な建築は、常

に、左右均斉の配置法を取っている。文献によれば、北魏の永明寺の金堂の前には塔婆があった。また前記新羅の皇龍寺も同様であったことは、その遺趾を見て明らかに知られる。四天王寺がこの大陸的配置を取ったことは、当時文化の形勢上当然のことである。しかるにその後、聖徳太子が法隆寺を建立せられし時には、大陸の慣例を破り、金堂と塔婆を左右に列べ立て、シナ人の最も重んずる均斉を打破された。太子は南大門を入り、中門を入りし時、金堂の前面が塔婆のために遮蔽されることを好まず、かつ金堂は伽藍の本尊を安んずる処、塔婆は釈尊の舍利を蔵むる処なるゆえ、両者を対等に伽藍の中心に左右に並べ、もってかくのごとき配置法を取られたものと想像される。この配置法が法隆寺に採用されるや、その後創立の法起寺も法輪寺もみなこれに準ずることとなった。また河内の野中寺、筑紫の観世音寺等もまたこの配置法を踏襲した。予らはこれにより、太子が外国の旧例旧慣に捉われず、自由に適当とする所を選択された英断に讃仰の念を禁ずることができぬ。

建物の平面 伽藍の建造物は、無論大陸の平面を準用せしも、法隆寺の中門のごとき特殊な平面は、彼の模倣にあらず、当時聖徳太子の御考えにより計画されたものと思わる。シナや朝鮮では、古来伽藍その他、宮殿・道觀等の門に偶数の柱間を用いたことを知らぬ。その柱間は一間にあらざれば、三間・五間ないし七間等、常に奇数である。しかるに法隆寺の中門が、偶数の四間であるのは実に珍らしく、古今東西に全く類例が無い。その側面の三間であるのも奇である（普通は二間）。法隆寺の中門にかくのごとく特殊の平面を選択したのはいかなる理由なるか、太子に深き御考えがあつてかくされたのであろう。すでに伽藍の中心に金堂と塔とを東西に並べ建てられたから、前面に金堂と塔とに対し別々に入口を設け、他に全く例の無い偶数の柱間、すなわち四間とせられたのであるかも知れぬ。とにかく伽藍堂塔の配置といい、中門の平面といい、従来の規矩きくに拘束されず、自由にその適当とする所を實行されたのは、太子の大識見に帰すべきものである。

建物の細部 建物の細部においても、大陸の様式以外において、往々我が建築家の創意に帰すべきものが発見さ

る。これは卓越せる太子の人格の感化によるのであろう。すなわち当時の我が芸術界の趨勢は、大陸の模倣に甘んぜず、独自の天地を開拓する意気に燃えていたのである。

基壇 法隆寺金堂および五重塔は二重の基壇の上に立っている。その後は法隆寺の夢殿を除くのほか、我が国に二重壇を有するものは無い。もし二重壇が大陸もしくは朝鮮にあつたならば、唐の影響を受けた奈良時代や、宋の影響を受けた鎌倉時代の建築には、この二重壇が無くてはならぬと思う。しかるに奈良時代以後には全くこれなきのみならず、朝鮮にも、シナにも、法隆寺堂塔のごとき二重壇は発見されぬ（もつとも新羅統一時代の小石塔には二重壇はあるが、大なる堂塔建築には無い）から、法隆寺堂塔の二重壇は大陸の影響にあらずして、太子が多雨の我が風土に適應せしめんがためゆえさらに築成されたものと思われる。これ実に太子の卓見にして、そのために地下より侵透し来れる湿気を遮断し、金堂も塔もその柱の腐蝕を免れ、創立以来千三百年の星霜を閲して、まだ一本も根継ぎをしたものが無い。かく安全に、無事に、保存されたのは、実に世界の奇蹟といわねばならぬ。

法隆寺五重塔の心柱 大正十五年一月、法隆寺五重塔の心柱下に空洞の発見されたことは、世間周知のことである。この空洞は、当初塔婆建立の際、心柱を深く地中に掘立てにした余波である。心柱を掘立てにすることは、シナにも、朝鮮にも無い。これは聖徳太子が特別の思召にて、古来「底津磐根に宮柱太知り立てる」という伝統的の法を用いられたのであろう。普通心柱はただちに礎石の上に立てるのであるが、太子はこれを多少不安に思い、我が古来の慣例により、深く地中に埋め立て、もって心柱の堅牢を期せられたものと思われる。これまた太子の独創的御意思を窺うことができる。

斗拱 飛鳥時代の建築たる法隆寺・法輪寺および法起寺の堂塔は、みな他の時代に見るべからざる一種の斗拱を用いている。すなわち大斗に皿板のあること、普通の卷斗の代わりに雲斗を用うること、二手先の斗、肘木の代わりにいわゆる雲形肘木を用うること等である。次の奈良時代よりは普通の斗、肘木をもって斗拱を構造している。

この雲斗・雲形肘木は全く飛鳥時代の特色にして、他の時代には見ることができぬのみならず、朝鮮にも、シナにも、全く形跡を発見せぬ。元来飛鳥時代の様式はシナの南北朝時代のものが、朝鮮を通過して我が国に伝来せしものと解すべきであるが、前述のごとく、朝鮮にも、シナにもこれが発見することができないのは実に不思議のことにして、いかなる理由によるか判断に苦しむのである。北朝の斗拱は雲崗（北魏）や、天竜山（北齊および隋）や、南北響堂山（北齊・隋）の石窟において、その様式を知ることができる。その大斗に皿板のあることは、我が飛鳥時代のものと同様なれども、いわゆる雲斗や雲形肘木の痕跡すらない。斗拱は普通の斗肘木より構成されている。また高句麗時代のものは満洲輯安（すなわち高句麗の旧都国内城）および朝鮮平壤付近の古墳の玄室内の壁画に描かれている。これは全くシナ北朝の石窟に刻まれた斗拱と同性質で、北朝と高句麗との親密なる関係を語っている。また往々二手先の斗肘木を描いているが、決して雲斗や雲形肘木の余影を認むることができぬ。もし北魏・北齊・隋・高句麗において、斗拱に雲斗・雲形肘木を応用したりとせば、これら北朝の石窟や高句麗の古墳内において必ず発見されねばならぬ。そのこれなきは、当時これを使用していなかったと断ずるのほかない。

しかし飛鳥時代の斗拱が、我が建築家の創意に出でたものと断言するのは早計である。おそらくは、当時百済より輸入されたものと解するのが妥当であろう。ただ百済の遺物のこれを徴するに足るべきものが現存していないのは遺憾である。もし百済より来たものとせば、百済はすでに論ぜしがごとく、南朝、梁・陳よりこれを伝えられたのであろう。すなわち我が飛鳥時代の斗拱は、北朝系にあらざりて、南朝系に属するのであろう。ただ南朝の遺物は、現存せるもの稀にして、とくに斗拱関係のものは全く残っていないから、これを実証することが困難である。すでに碑の様式において論ぜしがごとく、南朝のものは北朝のものより勁健奇矯の氣象に富んでいるとせば、北朝の普通の真面目な斗肘木に対し、南朝は流暢自由なる曲線よりなれる雲斗・雲肘木を用いたり想像するも不当ではあるまい。

柱および暮股 飛鳥時代の建築に用いられし柱には、いずれも胴部に著しく膨らみを有せるは、北魏・北齊および隋の石窟に刻まれた柱に膨らみのあるのと同様であり、また高句麗の古墳の玄室の壁画にあるのと同様である。さらに法隆寺の金堂や中門の高欄に人字形の暮股があるが、この種の暮股は、北魏・北齊および隋時代の石窟にも発見され、また高句麗古墳内部の壁画にも発見されるから、これはシナにおいて南北ともに同様の様式をもっていたものと想像される。

軒 飛鳥時代の建築の軒は、ただ垂木を一通り列べたいわゆる一軒であつて、垂木は直線形にして反りなく、その断面は長方形である。元来シナにては、ほとんど古今を通じて地垂木の断面は円形である。雲崗や天竜山の石窟における彫刻の軒の手法を見るに、その垂木は常に円形である。しかるに飛鳥時代の垂木の断面が独り長方形なるは、いかなる理由か、予の想像によれば、シナ・朝鮮のごとき木材豊富ならざる所にありては、垂木は普通皮剥ぎの丸太を用いたから、この断面円形なる垂木を生じたのである。しかるに我が国は森林に富み、木材が豊富であるから、すでに原史時代より檜の打ち割りの垂木を用いていたため、おのずからこの長方形の断面を有する垂木が生じ、それが飛鳥時代の堂塔に襲用されたものと思わる。これまた当時の建築家の意匠の外来の様式によりて拘束されざることを示すのである。

高欄 飛鳥時代の高欄につきては法隆寺の金堂や五重塔にあるものは、全く元禄年間の改造なれども、大体において当初の手法にならつたのである。その平桁と地覆間に雷文崩しの連子のあることは、シナ北朝石窟にその類例を見ることができから、この高欄の様式は、シナにては南北ともに同様であつたのであろう。

天井および天蓋 法隆寺金堂の天井が折上組入天井にして、格間・支輪間に蓮華や忍冬文を彩絵せるは、また南北朝式にして、とくに金堂内に懸吊された天蓋は、雲崗や竜門の石窟に刻み出されたものや、単独なる北朝石仏龕の上に造られたものと全く符節を合するがごとくである。かくのごとき完備せる木造の天蓋は朝鮮にも、シナにも

滅びたれば貴重の標本といわねばならぬ。

瓦 瓦をもつて屋蓋を葺くことは飛鳥時代、仏教建築の輸入に始まるので、当時百済より瓦博士を貢し、瓦の製法を伝えたことは文献に明らかである。法興寺・向原寺などの遺跡より発見された巴瓦の蓮華文様は、全く百済の旧都扶余から出土する巴瓦と同様であるのは、彼此親密の関係を示している。しかるにここに注意すべきは法隆寺に使用された巴瓦の文様はこれと形式を異にし、蓮華の弁面闊大にして中房また大蓮子の数多く、すこぶる雄大の氣象をあらわしている。かかる様式の巴瓦は百済にも、新羅にも、また高句麗にも発見されぬから、予が先年唱道せしがごとく、法隆寺建立の際、我が工匠の創意に成つたものに相違ない。とくに法隆寺に用いられた唐草瓦は、重厚にして瓦当面の忍冬文様は雄動勁舞の勢を呈し、その出来ばえは古今東西の唐草瓦、一もこれに比すべきものは無い。しかるにここに不思議に思われるは朝鮮の三国時代においてははまだ唐草瓦の用法を知らなかつたことである。予は高句麗や百済や古新羅時代の巴瓦を見しこと幾千を超越れども、当時の唐草瓦は一片も見たことはない。これは明らかに三国時代には唐草瓦の使用を知らなかつたためなのである。漢時代の石祠・石闕の屋蓋を見るに、巴瓦はあるが唐草瓦はなく、軒先は平瓦をもって終っている。南北朝時代に唐草瓦のあつたかどうかはなお研究を要するが、少なくとも朝鮮には当時まだ発生しなかつたのである。しかるに我が法隆寺にこれを使用したりしとせば、これは我が工匠の創意に帰せねばならぬ。予はかつて論ぜしがごとく、この法隆寺の巴瓦・唐草瓦の斬新なる意匠は、鳥仏師に帰すべきものであるかも知れぬ。

ひとたび法隆寺に使用された巴瓦・唐草瓦の手法は、その後建立された法起寺・法輪寺・額安寺・中宮寺等にも襲用され、百済系以外において純日本系の雄勁斬新なる瓦当が一般に行なわるるに至つた。

以上説き来りしことを概言すれば、飛鳥時代の建築様式は朝鮮を介して、シナ南北朝式を輸入せしものなれども、

とくに南朝系に属せしものと思われる。しかもその使用せし尺度は北朝の東魏尺である。

飛鳥時代の様式は無論大陸系のものなれども、当時の我が建築界は決して彼の追隨をこととせず、その宜しきに従いこれを基礎とし、独自の境地を開拓したのである。これは当時の我が国民の誇りであらねばならぬ。法隆寺堂塔の配置・平面ならびにその基壇・軒廻り・五重塔の心柱ないし屋蓋の瓦^{がとう}等みな我が工匠の新たな試みにして、その意気を示すものである。もっともこれには、聖徳太子の御指導の力があらずかつて多かったのである。優秀なる海外文化輸入に際し、我が建築界は太子のごとき一大指導者を得たことは幸福といわねばならぬ。予はさらに玉虫厨子を論じ、例の非再建問題にも触れてみたいと思つたが、期限切迫その余裕がないから他日を期することとした。

(原題「飛鳥時代の建築の起源と其特質」、『仏教美術』第一三冊、昭和四年六月、所収)

- 関野貞(大田博太郎編)『日本の建築と芸術』下(岩波書店、一九九九年十月)所収。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2_{\epsilon}}$ でタイプセットを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、

「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。